

リハビリテーションでは、拘縮と褥瘡を防ぐことの重要性が強調され、近年では、医療機関において体位変換が行われないために発生する褥瘡は減少してきた。一方、高齢社会を迎えて長期間にわたる介護における廃用症候群や、重度な障害や病態に起因する積極的な治療対象としての褥瘡は重要なテーマである。本特集では、褥瘡の予防と治療を含めたケアに対して理学療法にどのような効果が期待できるのかとともに、チーム医療としての褥瘡対策の実態を明らかにする。

■褥瘡の予防と治療における理学療法の役割（廣瀬秀行論文）

褥瘡対策に関しては、日本褥瘡学会を中心に DESIGN という評価手法や予防・治療ガイドラインの開発などが精力的に進められてきた。一方、褥瘡の発生機序における圧迫の制御の重要性が指摘されているが、理学療法士の関与は少ないのが現状である。圧力分散マットレスの選択時には、その目的である褥瘡を予防することと自立レベルを向上させることが対立するという矛盾も生じていたが、近年いろいろなマットレスが開発され、その両者が兼ね合うようになってきた。褥瘡治療において理学療法士が積極的に参画することで、医療費の削減と対象者の QOL の拡大を実現することが可能と考える。

■褥瘡に対する物理療法と運動療法（日高正巳論文）

理学療法士は、運動療法によって関節可動域の維持・拡大、筋萎縮の防止などを図り、褥瘡の発生要因を減らすことが大切である。それと同時に、運動療法が褥瘡の形成につながらないように皮膚を診ることを大切にしたい。また、褥瘡局所治療ガイドラインに盛り込まれている物理療法では、モダリティーの選択だけでなく、治療効果を示すためにも、刺激条件などについての的確に判断し、適用することが重要である。

■脊髄損傷者に対する褥瘡の予防と治療（篠山潤一論文）

褥瘡に対する理学療法にあたり、特別な知識や技術は必要ではない。医療チームが準備と計画性を持ち、共通の知識の下で対応を行うことが必要である。そのなかで理学療法士は、評価・予防用具の調整、選択など、褥瘡の予防や治癒促進に関わることができる。本特集が、「褥瘡」を理学療法の対象として捉えるきっかけとなり、「褥瘡を診る」理学療法士が増えていくことを期待したい。

■褥瘡対策委員会における理学療法士の役割と効果（當房加奈子、他論文）

高齢化に伴う寝たきり人口の増加は、褥瘡有症率の上昇を招いている。褥瘡は患者の身体・精神的負担だけでなく、治療・処置にかかる医療費の増大など、様々な負の要素を有している。「超高齢社会」を迎え、褥瘡が社会的問題となってきたことは、2002（平成 14）年の診療報酬改定で、厚生労働省が施策を投じたことから汲み取れる。本稿では褥瘡管理体制の中核となる褥瘡対策委員会の設置意義と活動紹介、理学療法士の役割について報告する。

■高齢者に対する褥瘡の予防と治療—遠隔地シーティングサポートシステムの実践（福田聡史論文）

介護老人福祉施設における入所者を要介護度別にみると、要介護 4.5 といった入所者が全体の 6 割を占めている。この状況から、重度な高齢障害者における褥瘡の問題が浮上している。当施設では、地理的に離れた場所にあるリハビリテーション専門病院の褥瘡再発・予防対策を施行しているシーティングスタッフと対応方法を一緒に検討する「遠隔地シーティングサポートシステム」を実践している。この活動の実践について紹介し、有効性について述べる。

とびらページの書道作品について

ソウ
「想」

解説：秋はもの思う季節。でも、考えすぎないようにしたい。